

単元の目標

継続的に生き物を飼育する活動を通して、生き物の生態、変化や成長の様子について考え、それらが生命をもっていることや、成長していることに気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付け、生き物に親しみをもち、大切にすることができるようにする。

本時の目標

生き物の世話をしたり観察したりして、気付いたことや感じたことを友達と伝え合い、育てている生き物の様子や特徴、日々の世話の大切さに気付くことができるようにする。

事前研修の内容

◆指導案検討（研究主任、1年・2年担任、幼保小連携・接続主任、幼保の保育者）

・単元に対する教師の願いの共有

自分の言葉で生き物の魅力や世話をすることについて語れるようになることを目指したい。主体的に活動することを意識して、「命の大切さ」に気付いてほしい。

・幼児期の経験を知る

単元につながるような幼児の姿を共有（ダンゴムシやバッタなど虫の飼育、蝶の羽化に関わる経験など）

・学習を深めるために

飼育ケース（丸形の浅い物）にすることで、友達と顔を突き合わせて話す環境づくり

継続して関心をもてるように、気付きや情報を付箋で共有

1年生が必要な情報を収集しやすいように、就学前施設の科学の絵本などを活用

◆事前授業（別の学級で事前に行う授業）と授業後の協議（1年・2年担任、幼保小連携・接続主任、保育者）

・幼児教育の視点から提案した事前授業

児童が持つ説明用原稿があると、教師は支援に入りやすいが、読むことに必死になる姿がある。生き物を見たり、触れたりしながら自然に会話している姿も見られたので、伝えたい気持ちを大切にできればよい。

・幼児教育の視点から述べた内容

飼育する生き物を自分たちで決め、世話をしていることで、生き物の特徴への気付きと生き物に対する愛着が生まれている。それにより友達に自分の思いを伝えたいという思いが深まることになる。

■本時のポイント

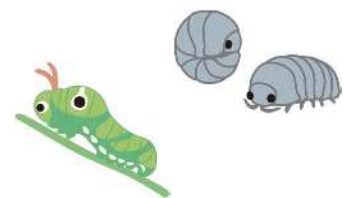
- ・指導案検討や事前授業を通じて学んだ幼児教育の視点を生かした環境構成を工夫する。
- ・当日までに、生き物に関する本や図鑑などを用意し、生き物への興味・関心が広がりやすいようにした。また、子どもと考えたためあてを図に表し、単元の流れを視覚化できるようにした。さらに、日々の生活の中で生き物との関わりを大切に、生き物に愛着をもてるように、掲示板で情報共有した。

■授業・交流内容

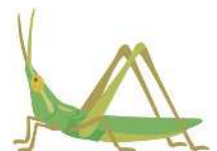
環境構成
教師の願い

観察から気づいたことを共有したい。

授業の中で子どもたちが主体的に考えたためあてと授業の足跡⇒可視化



めあてがわかり、自分たちで意識をもってほしい。



つながりたくなる環境構成の工夫①
生き物を挟んで向き合う機の配置
グループの規模(5グループ)

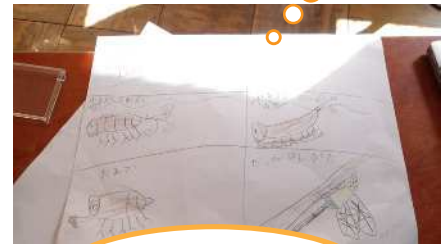


子どもたちが
育てたいと
思った生き物を
飼育させたい。

つながりたくなる環境構成②
伝えたい相手がいる
伝えたいもの(生き物)がいる



興味をもって
育てたからこそ
わかる気付きだ。
その意欲を
大切にしたい。



触っても大丈夫だよ。
触る?



動画だと
わかりやすいな。

へえ。知らなかった。



ヤゴの顎は
伸びるんだよ。

■事後研修の内容

- 原稿を読まずに、自分たちの言葉で話すことで、より主体的に活動していた。伝えることが苦手な子どもも自ら作成した動画をヒントに相手を意識して伝えようとしていた。
- これまで生き物と関わってきたからこそ、生き物への興味や愛情が感じられ、意欲的に活動していた。
- 話すことよりも生き物を触ることをメインにしていたグループもあったが、生き物を介して、自然な言葉のやり取りがあり、友達と関わっている姿があった。
- つながりたくなる環境・主体的な活動になる環境があり、友達と一緒に学びやすい環境であった。
- 単元について就学前の子どもの様子を聞いたり、授業作りに参加したりするなど教員同士で交流したことで、幼児期の経験を踏まえた学習になった。肯定的な子ども観・環境構成の工夫・子どもの興味関心と経験を生かした活動の展開など、積み重ねられるようにしたい。
- 生き物の紹介で、子どもが「この子は」と1匹ずつ違うことに気付いて、紹介していた。違いに気付き、愛着をもつことができていた。

授業を振り返って

- 幼保小の教員・保育者で話し合い、アイデアを出し合ったことで、子どもの興味関心にあった活動にすることができた。子どもたち自身が、生き物に愛着をもって、自分たちがしているという意欲や主体性をもって活動できた。
- 単元のねらいを共有し、どのように自分たちの言葉で表現していくのか、言語能力の育成をはじめ生活科の学びについて一層考えていきたい。